



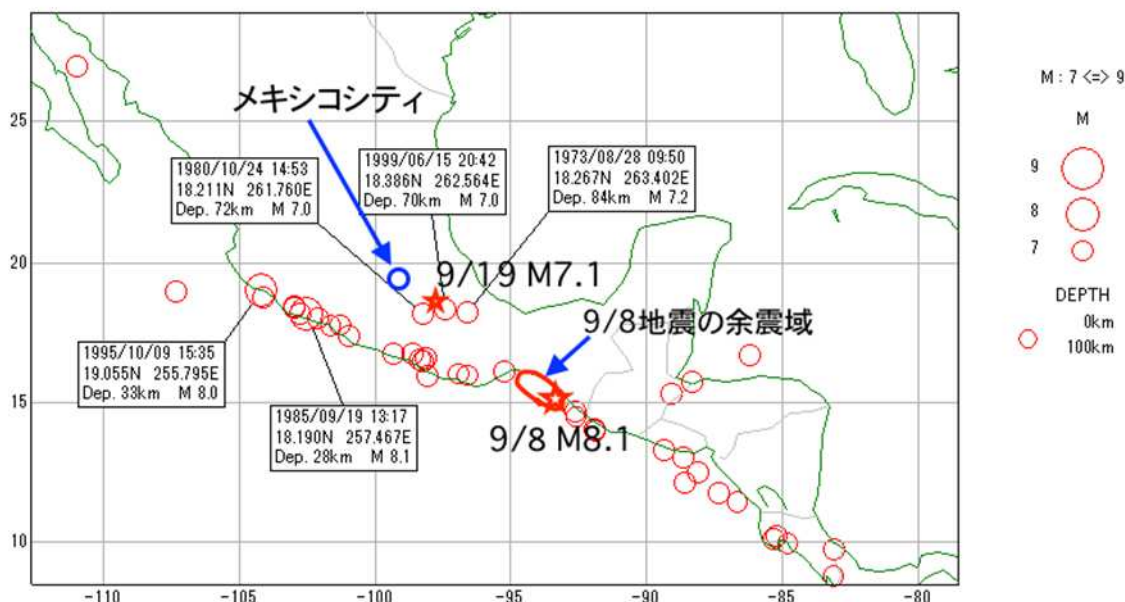
メキシコでまた被害地震が発生しました

9月19日、8日のマグニチュード8.1の巨大地震に続いて、そこから300kmほど離れた地点で、今度はマグニチュード7.1の地震が発生しました。この地震は8日のマグニチュード8.1の巨大地震の余震ではありません。巨大地震に誘発された地震と考えられます。

日本でも東日本大震災の翌日にマグニチュード6.7の長野県北部地震（栄村の地震）や3月15日には静岡県東部地震（マグニチュード6.4）が発生しています。これらは東日本大震災により誘発された地震で、余震とは異なります。

メキシコで発生したマグニチュード7.1の地震もこのカテゴリーの地震です。ただ内陸であったこと、メキシコシティに近かった事から、地震のエネルギーは約1/30と小さかったものの、被害が非常に大きくなったと推察されます。この9月19日の地震の近くでは、1973年、1980年、1999年にも同規模の地震が発生していた事がわかります。

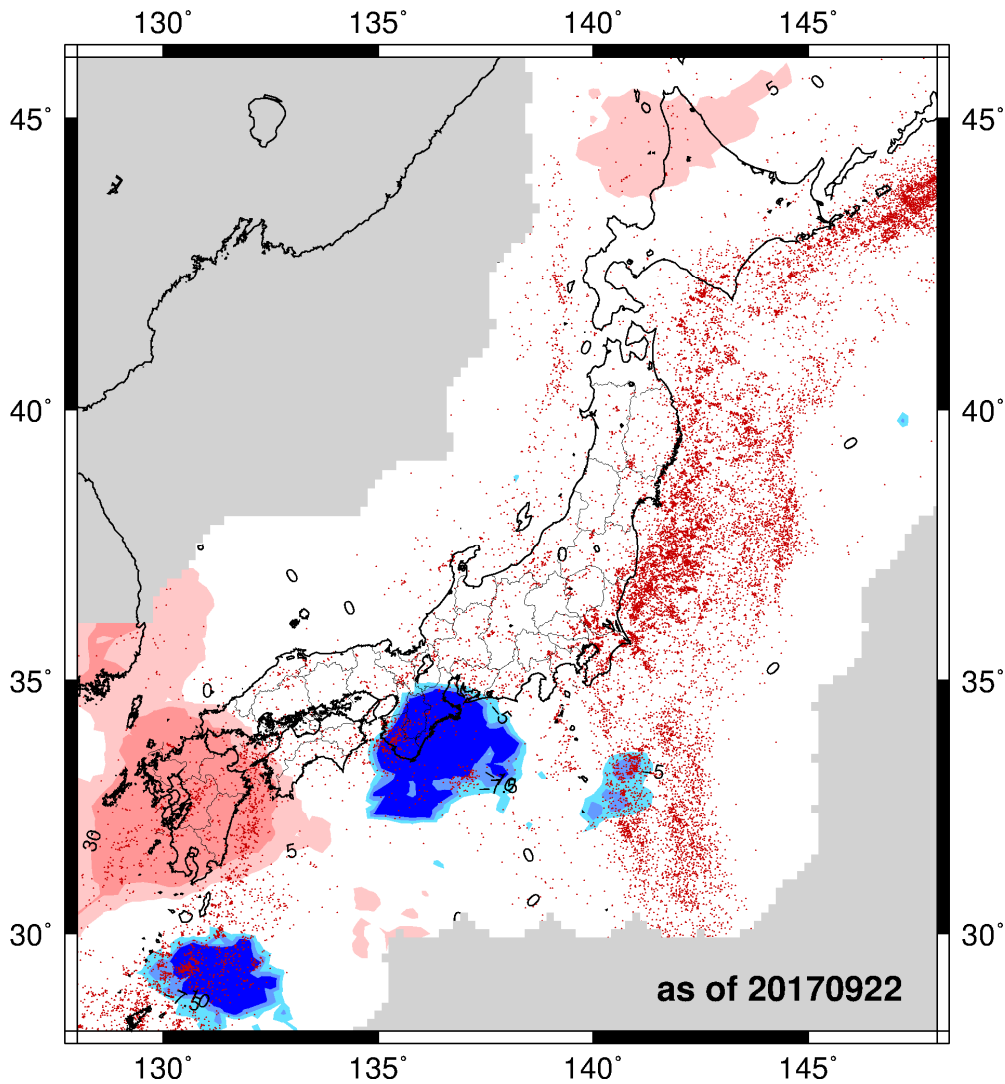
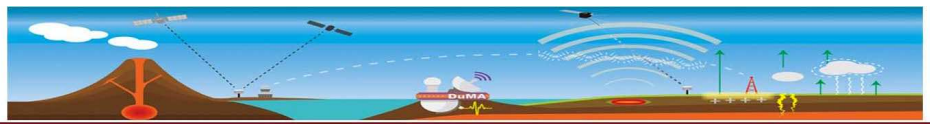
1970 1/1 0:0 -- 2017 8/31 23:59



メキシコシティは、かつて一帯が湖であったため、地盤が非常に悪く、液状化や長周期地震動などによる被害が必然的に大きくなる事が1985年の地震により証明されてしまいました。その後、耐震化や液状化防止工事なども行われたと推察されますが、やはりまだ多くの未対策の古い建物が多く残っていたのだと思われます。18日の地震は深さも深いため、日本であれば基本的に建築物には大きな被害は生じなかったはずですが、日本の現在の耐震基準は世界に誇れるものなのです。

海域のM7クラスの地震をターゲットとした地下天気図®解析

8月21日のニュースレターに引き続き、海域の長期間（2000年以降の17年間）の地震データを用いた地下天気図解析です。9月22日時点の地下天気図を次のページにお示しします。



5月の時点では、紀伊半島沖の地震活動静穏化のピークが過ぎたように見えたのですが、どうもそうではなかったようです。さらに静穏化の領域が広がってきている事が確認されました。従って過去の経験則が正しければ、静穏化の異常が継続していますので、現時点では紀伊半島を含む南海トラフ沿いで大きな地震が発生する可能性は低いという事になります。参考データとして8月18日時点の地下天気図を右に再掲します

